

「そろそろ寝るか」と言っつて『マナ』は立ち上がった。その時小さな玄関のノブがガチャガチャと音を立てた。『マナ』は扉越しに、恐る恐る「誰」と声を掛けた。しかし反応が無い。扉はまだガチャガチャと音をたてている。その扉は『マナ』がこの家に引つ越して来た時に、開かないように内側から鍵を掛けておいた扉である。それまでの扉は『マナ』には小さかったため、隣に別の大きな入り口を作り、今では『マナ』はそこから出入りしていたのであった。『マナ』はそつと大きな扉から外に出て、隣の小さな扉を見た。そこには妙にズングリムツクリした薄汚れた生き物が、扉に鍵を差込み、必死になって扉を開けようとしていた。「あんた誰」と『マナ』は尋ねた。その生き物は手の動きを止め、『マナ』を見上げた。そして、「ここに住んでいる・・・」と言つたまま考え込んでしまった。『マナ』は怪しげな奴と思つたが、とりあえず話を聞くため家の中に入れた。そしておぼろげな記憶と下手な言葉使いから、コヤツが昔この家に住んでいて、今は少し記憶を無くしていることを『マナ』は知つたのであった。しかし困つたことに、どうやら他に行く所が無いようである。『マナ』は暫く悩んだが、夜も遅いここに泊めてやることにした。『マナ』は気楽な気持ちで泊めてやつたが、数日経つた今も、何故かコヤツはここにいる。そうすつかり住み着いてしまったのである。『マナ』はコヤツをその薄汚れた格好から、何時の日からか『のら』と呼ぶようになつていった。『のら』と呼ぶとニコニコして寄つてくる。『のら』の意味がわかつているとも思えないが、どうやら名前を気に入つたようである。そしていつの頃からか、自分自身でも『のら』と呼ぶようになつていった。

